

## あきれた検問

★京都府 京北 上和知川

☆仏主 あまごの里

「今日は、やっぱり知見谷と佐々里？」

「お任せします。・・・でも、釣らせてー！」

フライを初めて間もない上司のGさんを助手席に乗せ、いつもの美山お気に入り入りの谷を指すものの、釣らせてあげたい想いもあって、密かに河内谷の放流釣り場も頭の片隅においていた。

そう言う私も、漸く溪に入ってフライで数匹釣れたか否かの駆け出しの頃で、まだまだ他人に教える程の技量もない。

しかし、一応は他の釣りも少しは経験していて、バックパッキングからアウトドアの一環としてフライをやりたいと思いついたGさんとしては、唯一の拠所だったんだらう。

もう直ぐ右折と言う所で、パトライトの嫌な明かりが目に入った。

「なんや？検問？何事や？Gさん今何時？」

答えを聞く間もなく、シムニーは止められ、窓を開けると小太りの警官が訝しげな面持ちで話しかけてきた。

「えらいギョウサン荷物積んでるが、べににん行へっ。」

「そこ、右に曲がります。」

「何しに行く？」

「釣りですわ・・・」

「海はまっすぐやぞー！・・・」

（誰が釣りは海と決めたんや！・・・ホンマ・・・と心の中で思いつつ・・・）

「いや、川ですわ・・・」

「川？・・・鮎か？」

「いや・・・あまごですわ・・・」

「あまご？地方名で言わんと標準名で言うてくれ・・・わからん・・・」

（ややこしいおっさんやのう？何が関係あるねん？ホンマ・・・）

「ヤマメですわ・・・」

「ヤマメ？・・・どんな魚や？」

（・・・おっさん！・・・素人にはわからんし・・・）

「鱒です。鱒の小さいの・・・」

「鱒寿司の鱒かあ？」

「エエ・・・その子供みたいなもんですわ・・・」

（・・・みたいなもの？そんなもん、ミニミニの川で釣れんやろ・・・ちょっと荷物見せてくれるか・・・）

事態は最悪になってきた。洗々車を降りてバックハッチを開けると満載のキャンピング道具が照れ落ちた。

「キャンピングもするんか？この時期？」

「いや・・・これは置くていらないから積んでる

だけですわ・・・」

「竿はどれや？」

「これです。」

おもむろにロッドを差し出すと、たまたま買ったばかりのGさんの竿だった。

すると、それまで一言も口を開かなかったGさんが・・・

「フライロッドです。」・・・と口を開いた。

「・・・??？」

「フライフィッシングのロッドです。」

話が尚更ややこしくなるので、Gさんに自配せしたが、当の本人は得意げに笑顔で話している。

きっと、「私はフライをはじめたんです・・・とそれとなく他人に自慢したかったのかもしれない。

暫く考え込んだ警官がいきなり振り向き、目を見開いて興奮した。

「知ってる・知ってる・・・釣りキチ三平で読んだことあるぞ・・・鞭の様にしなやかに飛

ばす・・・あの釣りか？」

（おっさん中途半端に知るとかんでエエ！・・・なんで、そんなことだけ知るとんねん・・・）

と思っや否や、とつとつ私も切れてしまった。「だったら、あまごべらにい知ってるんじやないんですか？」

と口から洩れ出すと、任の言葉と井田 駿

は交差点で右折を促すひとつの看板に釘付けとなった。

それは和知川上流「あまの里」の看板だった。

「あまの里……ほらあまのこの看板になんて書いてあります？」

交差点を指差し、警官に問いかけた。

指差す方向に目をやり、(しっかりと目をひんむいて読めー)とばかりに詰め寄った。

「モータ屋……」「……とドライブインの看板を見ている……」

(誰が店の名前を聞いてんねん？……) コイツ……頭・温いんちやうか？……) ……

もうイライラは頂点……

「ちやうちやう……その向こう側……) …… あまの里……の……って書いてあるぞ……」

「……」 ……あまの里……書いたあまの里……書いてくるな……」

(ほんま……手間のかかるおつらんや！……) ……だからあまの里……あまの里……行はますねん！……) ……

そこで、あまの里を釣りますねん！……) …… わかってもらえましたあ？」

それから警官は態度を変え、自分の釣りの話をしはじめた。

なんでも、最近はじめた防波堤のサビキ釣り

にハマッていて、非番になると舞鶴まで通っているらしい……

もはや、検問は釣り談義になっていた。

時間が気になる私は適当に相槌を打つが、Gさんは他の釣りなどやったこともないのに、上手く相槌を打ちながら、未だ魚を釣るところか

キャストイングもままならないにもかかわらず、フライの講釈を述べている。

「餌は何や？……」「……と警官が聞いてきた。すると、Gさんは車の中のベストを取り出すようにしている。

慌てた私は「時間ないでえ」と小声でGさんを阻止し……バックハッチを閉めた。

そろそろ切り上げる素振りを見せながら……) ……餌は川虫です。川の虫を捕まえて餌にしませぬん……飛んでる虫でも捕まえて餌にしませぬ……」

「トンボなんか餌にするんか？」

「まあ、できるでしょうね……私ラカゲロウが好きですけど……」

「ほお……」

「あー！もうこんな時間や……ほな……もう行ってもよろしいかあ？」

「……あまの里……お気を付けて……」

「おお……おお……お勤め頑張って下さい……」

と漸く開放された。

「ツチッ……せっかくフライを見せてやろうと思ったのに……) ……なんで川虫捕まえるなんて言うたんや？……とGさん……) ……

「あねえ、あまの里で毛鉤でしたら、どおすなんの……終わらへんでえ……) ……

遅れを取り戻す様に突っ走る最中……) ……

「Gさん……もう、結構時間かかったし、マジにあまの里に行ってみいひんか？」

「あまの里……) ……

「ええ……マジかあ……釣れんのお？」

「あまの里……) ……

「そりゃウジャウジャおるやろあ……) ……早く釣りたい一心で、適当にGさんに促すと、

「任すわあ……) ……となり、急遽目的地変更……) ……

暫く走ったところでYの字路を左に入り、川沿いを走って日も高くなった頃に到着……) ……早速、

魚券を購入すると、目の前のト口場にバケツ放置してくれた。

とても小さな川の釣り場だったが、管理人さんがとても親切で、未熟な二人組には適度の釣り場だった。

結局、日没間近まで頑張って……) ……Gさんは

二つで一匹、私はドライブで3匹だった。

## ■上和知川の二案内

最上流の集落・・・仏主（ほとす）の奥に漁協が営む小さな放流釣り場がある。新緑の頃は釣り人だけだが、川に足が浸けられる時期を迎えると、つかみ取りの子供達でこった返す時もあり、勇んで出かけても閉口させるを得ない時もあった。全体的に浅い平瀬が多かった。

はじめた当初は足しげくかよったが、それなりに釣れる様になると川自体が一日には足らず、時間をもてあます様になってきた。

放流はあまごだけで、成魚放流のウブなあまごが釣れるには釣れたが、今から思えばとても溪流釣りと言うには程遠かったと記憶する。

道から竿を振れるところが多く、怠慢タワーキャストもいいところ、暫くこのズボラ釣りの癖がついて川原に降りると、当たり前前の水平キヤストがぎこちなく思えて仕方がなかった。

それでも上流に詰めると小ぶりながら天然のヤマメも釣れ、下流域は上之見の支流でもそれなりに釣果はあったと記憶する。

でも、お隣の美山川と比べると、やはり大きく気を惹く要素がなく、しだいに足が遠のいて何時しか忘れ去られ記憶の片隅に残る川となっている。

ある釣り人は小学生の子供に釣りを教えていた。私は結局、娘にしか恵まれなかったが・・・

もし、息子が居たら最初にここに連れて行ったかもしれない。フライと溪流を教える為に・・・



初心者にもかかわらず講釈が上手だったGさんも、今は帰らぬ人となりこの川の記憶と共に薄れて行く様な気がして、時間に余裕があれば久しぶりに訪れたいと思っている・・・でも、そんな暇はないだろうなあ・・・

こんな釣り場だが、思い起こせば、あの釣りキチ警官の「あきれた検問」を受けなければ、間違いなく美山に直行しており、ここ上和知川は記憶の片隅にも残らぬ未知の川となっていたに違いない。

2006年 10月